地域の学校へ

写真は名古屋の社会福祉法人 AJU 自立の家『福祉情報誌』2020 年 10 月 20 号。ここに、人工呼吸器ユーザーで中学 3 年生の林京香さんのお母さん、有香さんが寄稿している。京香さんとは 7 年ほど前に出会った。3 年前までの「名古屋時代」を思い出しながら読んだ。こころに響くレポートを抜粋して紹介したい。

重度障害児と言われる娘が地域の学校（普通学級）に在籍して 9 年目。インクルーシブ教育がどのように実践され、変化してきたのか。娘が入学した 2012 年は、障害者基本法が改正されたばかりでした。「障害の有無で分け隔てることなく共に学ぶ」という概念が初めて規定されましたが、今までの修学システムが根強い影響をもち、まだまだ認知度は低いのが現状でした。障害児が普通学級へ入学することへ、根拠のない不安や反感を覚えた人も、地域に少なからずいました。

娘も ALS 同様に手足もほとんど動かせず、眼球のみで人工呼吸器と共に生きています。自分の身体の痛みより、他者からの自分の扱われ方、差別の言葉、自分の要望に対応してもらえない社会制度や生活環境、その人と接する支援者や医療関係者等の周りの残忍な態度により、生きる意欲はどれほど削がれてしまうものか？重く考えて欲しい。障害とは、重くもなり、軽くもなりえる。それは周りの人の態度や環境次第で変わるということなのです。

だから娘は、一般的には重度障害者と言われるかもしれませんが、バリアフリーに整備された地域の学校で、周りの支援者の当事者目線の温かいサポートや、クラスメイトの年頃特有のふつうの接し方に囲まれ、「障害」の少ない生活、すなわち障害をもたないと言われる人たちと対等でふつうの生活を送り、ある意味では障害者ではなくなっているのです。

娘が地域の学校で生き、障害のある子への合理的配慮が浸透していく中で、「障害のある子にとって過ごしやすい地域」は、「誰もが安心して暮らせる地域」へ変わっていったのを感じます。娘が入学したことで、学校にエレベーターが設置された当初は、「1 人のために税金が使われるのは納得できない」と、ネット上で非難する声もありました。しかし、娘の卒業後には足の不自由な校長先生が赴任されたのです。中学校では車いすユーザーの教員が赴任され、部活動でケガをして松葉杖になってしまう生徒もいて、お互いにエレベーターを譲り合って乗っています。

「1 人のため」から始まり、「みんなのため」へと広がりを見せていくことが、インクルーシブ教育の奥深さと感じるところです。

レポートは京香さんと親友ひよりさんとの会話で締めくくられる。これは今年 3 月に、神奈川新聞で紹介されたものだ。「共に学び、育つその先に膨らむ夢」と。

（2020 年 12 月 3 日）